井上円了記念研究助成　研究所プロジェクト

在日ムスリムによる多文化共生社会構築の試み ——インドネシア人，トルコ人，パキスタン人の宗教ネットワークを事例に

研究代表者：子島進（国際学部国際地域学科・教授）
研究分担者：三沢伸生（社会学部社会文化システム学科・教授）
研究分担者：服部美奈（アジア文化研究所・客員研究員）

21世紀に入って，日本の人口減少が進む一方で，在留外国人は着実に増加してきた。2019年６月現在で，その数は282万人となっている。日本のムスリム人口も増え続け，かなり大まかな数字ではあるが，10～20万人と推定されている。日本人にとって，イスラームはこれまであまりなじみのない宗教であっただけに，ムスリムの存在を多文化共生の枠組みで考える本プログラムには大きな意義がある。

最終年となる本年（2019年度）の最大の活動は，聞き取り調査を進めてきた３つのモスクの関係者を東洋大学に招聘し，ワークショップを行ったことである。このワークショップにおけるモスクからの報告を中心に，本稿をまとめることとしたい。

「モスクによる地域交流ワークショップ」は，2019年11月10日（日）に白山キャンパス10号館A101教室で開催した（後ろのページにあるのがそのときの案内のポスターである）。

当日は，本プロジェクトのメンバー（子島進，服部美奈，三沢伸生）とモスクからの報告者に加えて，関心をもつ他大学の教員，地域住民，そして本学学生などおよそ20名が参加した。

少人数のアットホームな雰囲気の中で，密度の高い議論を展開することができた。

当日のスケジュールは，以下の通りである。

9：00- 9：10　　開会あいさつ　三沢 伸生（東洋大学）
パート１「モスク報告」
9：10-10：00　報告１　下山 茂（東京ジャーミィ）
10：10-11：00　報告２　ハルーン・クレーシー（大塚モスク）
11：10-12：00　報告３　サラ クレシ好美（名古屋モスク）
昼食・自由交流
パート２「大学との交流の可能性」
13：30-13：45　早稲田大学モスク会議　岡井 宏文（共愛学園前橋国際大学）
13：45-14：00　東洋大学運動会　子島 進（東洋大学）
14：00-15：00　意見交換
15：00-15：15　休憩
15：15-15：45　まとめ・閉会あいさつ　子島進

まず，プロジェクト･メンバーの三沢（歴史学）が，モスクの地域交流を研究する意義について，次のように述べた。

日本のモスクによる社会活動が盛んになるにつれ，大学側も非常に関心を高めている。学生の関

心も同時に高くなっている。戦前戦中期の日本の大学では，「回教政策」の研究が中心となっていたが，現代日本では，滞日ムスリムの増加，ムスリム観光客の増加，そしてハラールのブームなどがあいまって，現在進行形のモスクの活動に注目が集まっている。

早稲田大学では店田先生や当日午後に報告した岡井先生を中心に，「全国モスク代表者会議」を推進してきた。これは，日本における多文化共生を考え，実践していくうえで重要なものだったわけであるが，当日のワークショップもその延長線上に位置づけることができる。モスクが日本で地域コミュニティとの関係をいかに構築し，維持し，さらに発展させようとしているのか。現在，さらに未来志向という形で研究を進めていくことの意義を，本ワークショップで改めて確認したい。

午前中のパート１「モスク報告」は，３つのモスクからの報告で構成されていた。

東京ジャーミィの下山氏は，地域交流において一番大事なことは，「住民の顔がわかっていること」だと強調した。地域の住民の顔を知るには，朝夕のあいさつが欠かせない。通りで出会ったら「おはようございます」「こんにちは」とあいさつをすることが地域交流の基本である。戦中からモスクに住み込みで管理人として働いていたラマザンサファさんは，通りすがりの住民にあいさつをして，路上で立ち話をしていた。交流という意味では，この路上でのあいさつと気さくな井戸端会議が，今でも重要であり，東京ジャーミィは，この伝統を大事にしていきたいとのことであった。

現在の東京ジャーミィは，2000年に新しく建て直したものであり，下山氏が働きだしてから９年ほど経過している。この９年間，下山氏は地域住民との交流に心を砕いてきた。まず，朝の通勤の途中で出会った地域住民と言葉を交わしている。地域の町会長宅も折につけ訪問している。また，何百部というモスクの見学案内のチラシを周辺地域で配布している。特にラマダーン月の間は，断食が終わる夕方にイフタールという食事会を開催しており，毎夕，地域の10家族くらいが参加しているとのことであった。

下山氏は，地域住民からの苦情にもアンテナを張り，問題が小さいうちに対処している。たとえば改築工事の騒音，モスク付属のインターナショナルスクールに通う子どもたちの路上でのおしゃべり，違法駐車などに対して注意を払っているとのことであった。

下山氏はまた，イスラームを知りたいと思っている日本人が増えつつあることを実感しており，その人たちへの情報発信が，自分たちに課せられた重要な仕事だと認識していると語った。「私たちがしゃべらないと，他に誰もしゃべる人がいない」という使命感のもと，東京ジャーミィでは土日に見学ツアーを実施している。最初は10～20人だった参加者が，今では100人を越える日が多いとのことであった。

大塚モスクのハルーン・クレーシー氏の報告で印象的だったのは，国内外での支援活動が地域住民との協働を生み出したということである。大塚モスクの最初の海外協力活動は，アフガニスタンへ古着を送る活動であった。古着を送ってくださいという呼びかけは，全国紙の新聞に掲載されたこともあり，日本中から反響があった。その後，この活動は，女子のための学校を建設する息の長い支援へと発展していった。

2011年の東日本大震災に際しては，このアフガニスタン支援のネットワークを生かして，福島県いわき市の被災者に対して長期間にわたる支援を継続した。このときは，大塚の地域住民や周辺の神社やお寺もモスクを中心とする支援活動に加わった。2018年の西日本豪雨被害に際しては，岡山にあるモスクと広島のお寺と協力

ワークショップ会場風景

して支援に取り組んでいる。

近年は，池袋や大塚のホームレス支援（定期的な炊き出し）が定着してきた。同モスクでは，毎週土曜日に「カレー会」を行っているが，そこにカレーを食べにくるホームレスもいるとのことである。この活動には，モスクの近くにあるレストランも参加している。モスクがあり，ムスリムの住民が増えていることから，大塚にはハラールのレストランが増えている。そのオーナーや（ハラールではない）中華レストランが，一日おきにあまったごはんを弁当にして近くの公園で配るという活動が，２年半ほど続いている。ハルーン氏は「日本人も含めて，みなさんいろいろやりたいんですが，一歩踏み出す勇気がない。でもモスクをきっかけにして，みなさん非常にすばらしい活動ができるんですよ」と述べた。このアイデアをほかのモスクにも伝えて，活動を大きくしたいとのことであった。

ワークショップ登壇者・参加者

名古屋モスクのサラ好美氏からの報告は，次世代のヤングムスリムによる地域交流に焦点を当てたものだった。サラ氏自身の問題意識は，下山氏とも共通するものがある。モスクとは，第一義的にはムスリムが礼拝する場所であり，当然ムスリムのためにある。しかし，日本において，果たしてそれだけで十分なのだろうかとサラ氏は問いを立てる。日本人がイスラームに関心をもったとき，モスクを訪れてみたいと考えるのは自然だが，名古屋モスクにはずいぶん遠方からの訪問者も多い。それは，近場に関心に応えてくれるモスクが少ないからだという。モスクを訪れる（とりわけ）若い世代の日本人と話をすることで，それまで彼らが漠然と持っていた「イスラームはこわい」というイメージを払拭できるという手ごたえを，サラ氏は得てきた。このことから，ムスリムの側から動くことの重要性（=情報の発信）を認識して，交流活動をつづけてきたのである。

サラ氏は，ヤングムスリムが直面してきた深刻な問題にも取り組んできた。「イスラームは暴力的だ」というネガティブなイメージが日本社会に広がっているということは，学校でムスリムの子どもたちが「テロリスト」呼ばわりされかねないということでもある。そのような環境では，子もどたちは孤立しがちで，イスラームから離れてしまう。一番多感な時期に，つらい思いをさせないように，名古屋モスクではヤングムスリムに対する取り組みを続けてきた。具体的には，モスクに隣接する建物で，ヤングムスリムだけが集まって話ができる場を作ったのである。そこでは，スカーフかぶりたくない子どもも参加して，仲間を得られる。親にも言えない気持ちを話し合い，自分と同じ経験をしている子どもがいることをおたがいに知る。（マイノリティではなく）マジョリティであるという経験をすることで，子供たちは安心し，気持ちが楽になるという。

ムスリムであるというアイデンティティを獲得すると，ムスリムであることを知ってもらいたいと，彼らは発信を始めようとする。中には，Youtubeでの発信を始める者もいる。名古屋モスクでは，そのような若い世代に，モスクを訪問する高校生や大学生への説明を任せている。最初はうまくしゃべれなくても，次はうまくしゃべれるように練習し，交流会の経験を重ねていく。

この名古屋モスクの取り組みに対しては，ワークショップに参加していた東洋大生から共感の声があがった。端的に言えば，同世代の日本人が，ヤングムスリムの可能性を感じたということだろう。後日，自分でサラ氏に連絡し，名古屋モスク訪問を決めた学生もいたことからも，そのことは確認できる。

以上，11月10日に開催したワークショップにおけるモスク報告を紹介した。同ワークショップの全体は，別途プロジェクトの最終報報告書として刊行する予定である。

東洋大学 アジア文化研究所

モスクによる 地域交流ワークショップ

2019 11/10 日 9:00-15:45

東洋大学 白山校舎 10 号館 1 階 A101 教室

※参加自由ですが要事前予約
定員になり次第締め切ります
予約先：03-3945-7490（アジア文化研究所）

プログラム

9:00-9:10　開会あいさつ　三沢 伸生

主題「モスク報告」

9:10-10:00　報告 1　下山 茂
10:10-11:00　報告 2　ハルーン・クレーシー
11:10-12:00　報告 3　サラ クレシ好美

主題「大学との交流の可能性」

13:30-13:45　早稲田大学モスク会議　岡井 宏文
13:45-14:00　東洋大学運動会　子島 進
14:00-15:00　意見交換
15:00-15:15　休憩
15:15-15:45　まとめ・閉会あいさつ　子島進

東洋大学
白山キャンパス

〒112-8606
東京都文京区白山五丁目28番20号

- 都営地下鉄三田線「白山」駅下車徒歩5分
- 東京メトロ南北線「本駒込」駅下車徒歩5分
- 都営バス 茶63「東洋大学前」下車すぐ
- 文京区コミュニティバス B-ぐる「東洋大学前」下車すぐ

TEL 03-3945-7490（アジア文化研究所）
http://www.toyo.ac.jp/site/acri/

主催
井上円了記念研究助成研究所プロジェクト「在日ムスリムによる多文化共生社会構築の試み―インドネシア人、トルコ人、パキスタン人の宗教ネットワークを事例に」（研究代表：子島進・東洋大学国際部教授）

東洋大学 TOYO UNIVERSITY

「哲学する心」の軌跡とこれから

The Foundation and Future of Philosophical Mind
～井上円了没後 100 周年～
THE CENTENARY OF THE DEATH OF ENRYO INOUE